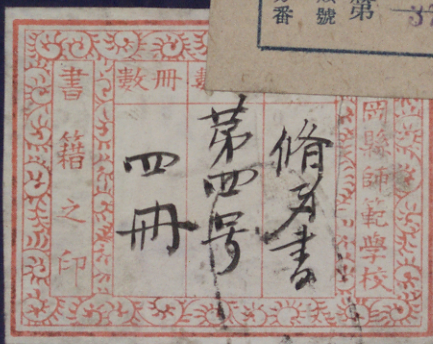


末松氏  
修身女訓  
生徒用  
參

福岡第一師範學校  
(學校圖書)

登錄 番	第	號
社會科學門		
教育部		
教授法	修身	項
C2	83	次
全	冊ノ内第	冊
分類 番	第	號
372.1		



圖書 和圖書 遡



福岡教育大学蔵書

T1A3

22

Su17

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4

MADE IN JAPAN



159.6  
Su 17

(文部省検定済)

文學博士末松謙澄著

# 修身女訓

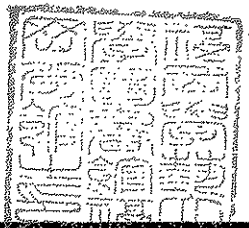
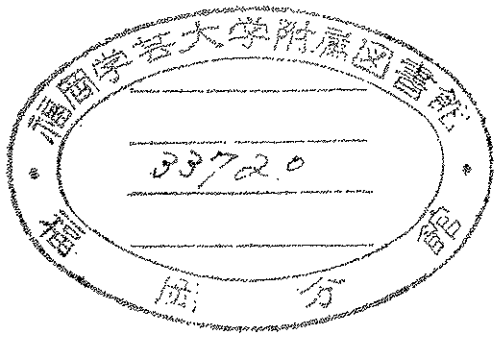
參

全四冊  
東京  
八尾  
版

## 修身女訓卷之三

### 目次

第一	婦道	第一丁
第二	稻生恒軒の妻	第二丁
第三	姉妹の友愛	第四丁
第四	鐘尾の姉妹	第四丁
第五	友の交り	第六丁
第六	夫婦の契り附原恭胤の妻	第七丁
第七	家を治むる務め	第九丁
第八	明智光秀の妻	第九丁





- 第九 親族には親むべし附南平公主 第十一丁
- 第十 郷黨の親み 第十三丁
- 第十一 四行を守るべし 第十三丁
- 第十二 人を嘲るべからず附花園大臣 第十四丁
- 第十三 恭儉 第十六丁
- 第十四 徳川秀忠の乳母 第十八丁
- 第十五 嫉妬を慎むべし附大和の貞女 第十九丁
- 第十六 堪忍附張公藝 第二十一丁
- 第十七 勤勉附つや女 第二十二丁
- 第十八 正直附龜婆 第二十五丁

- 第十九 人の不幸を憫むべし 第二十八丁
- 第二十 人を使ふ心得附綾部道弘の妻 第二十八丁
- 第二十一 夫を選ぶ心得 第三十丁
- 第二十二 教訓は嚴なるべし附松山天姥の母 第三十一丁
- 第二十三 國法附春日局 第三十三丁
- 第二十四 義氣と博愛附播州の老婆 第三十四丁
- 第二十五 勇氣附那須五郎の母 第三十七丁
- 第二十六 忠貞 第三十九丁
- 第二十七 君恩 第三十九丁



修身女訓卷之三

生徒用

末松謙澄編纂

第一 婦道

それ女子は我家を出で、夫の家を家とし、我父母を離れて、夫の父母を父母とするものなれば、嫁して後は舅姑に孝に、夫に貞なるべし。此二つを以て婦道の第一とす。孝とは舅姑に事へて敬愛を盡し、貞とは夫に事へて節操を正しくする



をいふされば婦の舅姑に事ふるはなほ我父母に事ふるが如く、朝夕の侍養は言ふも更なり、何事をなすにも氣を和らげ心を愉よろこばせ其意に忤こはざらんことを勉むべし、もゝ舅姑の言ふ所理にかなはずゝてわが身に行ひ難きことあらば詞を柔かにゝて其故を説き許ゆるしを受くべし、さりどて其事のさまでにむつかしからざるには心を矯めて言ふ所に従ひ其氣をうこなはぬ

やうになすべし

女子は概ね人に適くものなれどもとかくわが生れゝより見習ひ聞習ひたる實家の事のみ善しと心得舅姑への事へ方も自ら疎かになり易きより舅姑の心にも違ふなり既に其家み嫁する上は何事も舅姑の命を受けて其家風に従ふべゝ舅姑に能く事へ夫婦の間も睦むつく子孫繁昌するを見なば生みうだてたる父母も如何ば



かりか心安からんされば能く舅姑に事ふことは即ち實の父母にも孝を盡すの道なり務むべきこととこそ

## 第二 稻生恒軒の妻

稻生恒軒の妻春子は江戸の人にして河瀬外記の女なり幼き時母をうゝなひしが繼母に事ふること孝順にして其心を喜ばしむること實母に異ならず繼母死して後は異母弟をはぐみ

家事を治めて賢女の聞えあり後恒軒に嫁したるが柔順にして貞操の聞に高し其頃舅姑は離れて大坂に在りしが春子は常に文通して機嫌を伺ひ心を慰め其後舅姑淀





に移り住みける時江戸よりはるく上りけるに舅みまかりてければ是より姑に事へて専ら孝養を盡しけり春子奢侈を嫌ひ儉約を勉め慈悲の心深くして婢僕にも愛憐を加へ恩恵を施し又女工を能くして裁縫の道に精しく文筆にも長け一家の贈遺調製など細に帳簿に記載して漏す所なかりけり春子の如きは能く婦道を盡せりといふべきなり

### 第三 姉妹の友愛

姉妹の間は男の兄弟と異なりて一は優しきものなればかりそめにも逆らひ争ひ友愛の情に違ふことあるべからず艱難あれば相救ひ辛苦あれば相助け身を慎み操を重んじ父母兄弟に恥を與へず互の幸福を進むべきなり女は齡ひ長けぬれば概ね他人にかゝづくものなれば夫の姉妹どもあらんには實の姉妹の如く隔て

なく睦み語らひて、假初のことに、もさがしらごとなど構ふることあるべからず、夫の姉妹は、わが姉妹なり、などて友愛に違ひあるべき。

#### 第四 鐘尾の姉妹

備後國福山に鐘尾廣助といふものあり、父早く身まかりにければ、母と三人の妹とを養ひ、農事を勉めてありけるに、廣助は圖らず禍に罹りて、ひとやに囚はれ、母も其頃病死してけり、三人の

女子は一時よるべを失ひ、共に悲歎に沈みぬ、其時長女ふで十八歳なりしが、斯くてあるべきにあらねば、氣を勵ましつゝ、今年十四歳になりける妹とめに語りけるやう、今





かゝる不幸にあひ、徒に歎き悲むもかひなし。かくては終には飢にも迫りなん。我等たとひ女なりとて家を保つの道なくてやはとて、これを勵まゝ共に野に出で、耕作を勤め、末の妹のみかはまだ十歳の幼兒なりしかば、みかをば家に留めて、絲を繰らせけり。斯く三人の姉妹、心を合せて、業を勵みしかば、公の貢も滞りなく上納し、耕作の暇には、機を織り、絲をつむぎて、兄の舊債を償

ひ、また時節によりて、新衣を調へ、ひとやに送りて、兄の寒さを救ひ、其身は常に粗服を着け、粗食をはみ、朝は夙に起き、夜は早く鎖ゝて身を守りしかば、貞實にゝて友愛なること、官に聞へ、褒美として金若干を賜はりたり。

### 第五 友の交り

友垣の契り程、世にたのもゝくなつかゝきものはあらゝ、されば善を見ては互に勧め、惡を見て

は互に誠め言をまことにし行ひをあつくし偽り疎むことあるべからず心正しく道理に明なる人には殊に近づき親むべし一言の善もかりそめに聞き流さず積み重ねて覚えん程には人に優れたる智識を備ふるに至らんたのもうきも友なつかうきも友になんありける

女は男子と違ひ外に出ること少きものなれば親き友にも相見ること稀なるべけれど稀なる

ほど愈々信義を厚くし其交りを全くすべし女の己より身分家柄のまされる方みかゝづきて俄かに昔の友に高ぶり驕りなどするは殊更見にくく人の譏りをも招き易くゆめくかゝる振舞あるべからず

# 第六 夫婦の契り 附 原恭胤の妻

一たび婚姻して夫婦となるは二姓の好みを合せ上は祖先を承け下は子孫を繼ぐその事重け



れば深く慎むべし、もゝ時の幸不幸につれて婦  
節を翻へすことゝもあらば、祖先を輕しめ、子孫  
を恥かゝむるに異ならず、夫の家の富も貧も、皆  
定まれる縁と思ひ、たとひ艱難すればとて、人を  
も世をも怨むべからず、唯一筋に貞節を盡し、わ  
が勤むべきを勤めて、家の繁昌を謀るべし。  
原恭胤の妻は、秋田重信の女なり、年十六にして、  
恭胤に嫁しけるが、後恭胤故ありて、罪を蒙り、禁

錮に處せられて、家の  
祿をも削られけり、其  
頃或人恭胤の妻に向  
ひ、汝が嫁したる時は、  
恭胤才識の間に、もあ  
り、世祿もあまたあり  
たれども、今は全くこ  
れを失へりかゝる上



は、日ならず飢にも迫りなん、汝かの家に居て、艱難を重ねんよりは、他に良き夫を求めて、安樂を計るべしなど語りしに、恭胤の妻、涕を流して、女の道は二庭を踐まずとこそ承はれ、古の烈女の事を聞きつるに、辛苦を嘗め、艱難に堪へ、たとひ死すとも操はかへず、されば夫我を去らざるに、我如何でか去ることを求むべき、其上富めるに嫁して、貧しきに離るゝは不義なり、と答へて應

ぜず、愈々貞節を固く守り、恭胤の世を終るまで二十八年の久しき、一日の如く事へしとぞ。

### 第七 家を治むる務め

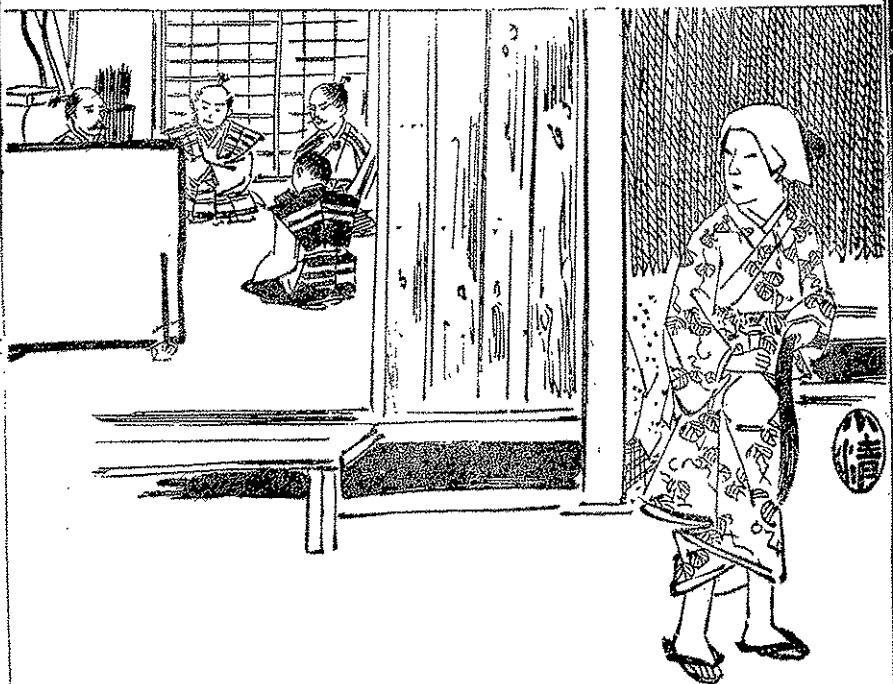
婦人第一の務は、夫を助け家を治むるにあり、如何に學問諸藝に長けたりとて、斯道に暗ければ、更に其かひなかるべし、家を治むるとは、衣食住より世間の交際、奉公人の使ひかたまで、よろづ身分に應じて心を配り、聊か怠る所なきをいふ。

夫の立身出世も妻の能く其家を治むるの功に  
よること多きものなり、必ずおろろかに思ふべ  
からず、

第八 明智光秀の妻

明智光秀の浪人たりし頃、朋友打集ひかはるが  
はる酒盛りして物語りせしことあり、光秀の番  
になりけるに、貧しき中のことゝて、朝夕の營み  
すら調はざる折柄にて、酒盛などゝは思ひもよ

らず、さりとて人並の  
ことの出来ざるも本  
意なく、如何せんと苦  
慮しながら、その妻に  
謀りけるに、妻はかひ  
くく受合ひ頓て  
朋友打集ひければ、酒  
肴など調へて、日頃の





貧しきには似もやらねば、光秀不審に堪へず人々の歸りて後、其故を尋ねけるに、竊にもどりを剪りて市にひさぎ、其日の費えにあてしよしを答ふ。光秀いたく其志に感ず、身を立て家を興して、これに報いはやと思ひ、やがて其由を妻に語り、身を立て、後の再會を約し、家を出で、仕を諸國に求め、遂に其志を遂げ、妻を呼び寄せ、あつく不惑を加へたり。此妻みまかりし時に、昔の

恩を報いんとて、光秀自ら葬送の供をもなしたりとす。髪までも剪らんなど、は常には爲すべきことならねど、夫を助け家を治むる志はかくの如くあるべきなり。たゞ光秀が後に由なき謀叛を企て、身を亡ぼし、家を破りしころうたてけれ。

第九 親族には親むべし 附 南平公主

他家に嫁して後は、舅姑に孝にして、夫の兄弟姉

妹を敬愛すべきはいふも更なりすべて親族の心を失はざるやうに親みを結ぶべきなり一家和らぎたりとて親族離るれば譏りもこれより出で来るものなりその親みを求めんには柔順にしてわが身をへりくだりびたすら人を敬ふべし古人は女を嫁するは我家に優るべく婦を娶るは我家に如かざるべしといへり是れとかく女はその實家の良きを持み謙遜の道を失ふ

もの多きが爲めなり慎むべきの至りならずやむか唐の太宗の姫宮南平公主といへるは王珪の子の敬直といへるに嫁したまひしに舅姑に事へて婦



道を盡し、身は天子の姫宮にてありながら、堂下に拜し、膳を捧げて事へたまひしを、父帝聞こめして、御威に入りたまひしとぞ、やんごとなき姫宮さへ、斯くの如くなしたまへり、まゝて下様の女子にして、人に高ぶり驕るなどのことあるべきやは、古歌に

人心ひきゝにくだる水ならば

身はやす川の名にやなりなん

といへるを忘るべからず

### 第十 郷黨の親み

親族に親むべきはさることながら、郷黨の親みもまた決して忽せにすべからず、わが郷黨は祖先より、往きもし來もして、慰め合へるものなれば、長く親み睦むべきなり、先づ近隣より始め、豊かなるも羨むことなく、貧しきも輕しむることなく、互に誠を以て交はるべし、世の中は遠き親



類よりも近き隣の頼もゝきこと多く、どかく和合なる隣りの少きより、互に非を擧げて誹りあひ、遂には互の恥をも世間にさらすことの多きは、歎かはゝき限りなり。

第十一 四行を守るべし

女に四行といふことあり、四行とは婦徳、婦言、婦容、婦功なり。心潔くして騒がゝからず、正しくして節操を守り、己が行の上に恥かゝき事あらん

かと、常に心に省み、起居振舞にも法度ある、これを婦徳といふ。口を開くに常に善き言葉を選び、て聞き苦しき事を言はず、言ふべき時に言ひて、誰が聞きても厭はゝからぬを婦言といふ。華美にして外見を飾れといふにはあらぬど、汚れたるを洗ひ清め、身なり鮮かに潔く、ゆあみ髪あらひも其爲すべき時に爲して、身に垢つき恥かしからぬやりにするを婦容といふ。常に裁ち縫ひ

絲くることなど、女の爲すべき業を怠らず、衣食の事をも潔く調へ、萬事家を治むるに心を専らにするを婦功といふ。是等の事を爲すは、さのみに難きことにはあらず、常に心に記して忘れぬやうにする時は、其事に臨みて自然と斯くなるものなり、必ず等閑に思ふべからず。

第十二 人を嘲るべからず 附 花園大臣

何事も他人を嘲ることあるべからず、とかく人

は我かゝことと思ふより、他人を嘲り笑ふことなどあるものなれども、嘲り笑へば却て自ら恥辱を取るものなり。

昔花園大臣の始めて一人の侍さむらいをかゝける時、歌よむよしを聞き、かば試みばやと思ひけるに、折しも秋の夕暮とて、機織虫の時を得がほに鳴く音を聞き、これにて歌一首仕れとありしかば、かの侍取り敢へずあをやぎのど五文字つゝ

り出でけるをそばに  
侍りし女房たち聞き  
もあへず秋の夕暮に  
さりとは時候をしも  
辨へぬことかなと一  
同に笑ひけるを大臣  
は人の言葉を聞き果  
てずしてなんでふ笑



ふことのあるべきとて侍に向ひばや仕れとあ  
りければかの侍

青柳の緑りの絲を繰りかへし

夏へて秋ぞ機織は鳴く

と口ずさみしかば初めに笑ひし女房たち恥ぢ  
入りて扣えたりとぞ

### 第十三 恭儉

恭儉とはわが身を慎み假にも驕り高ぶること

なく、我を責むることの周くして、人を責むることの寛かなる類をいふ、女はとかく見聞も狭きもの故や、もすれば人を非とし、己を是とすること多きものなり、その己を是とする心はせこそ、恭儉の徳を損ふ本なれ、人を敬ひても、其人猶禮の容を備へずば、わが敬の至らぬと顧み、人を慈みても、其人猶親みの情の現はれずば、わが慈みの足らぬと慮り、ひたすら己に反ふせんには、

人をとがむる暇なかるべし、これ恭儉の道なり、  
古歌に

白浪も寄せ來る方へ歸るなり、

ひとを浪華の、あゝと思ふな、

といへり、これをも思ひあはすべし、

又つゝまやかにして、身の養ひに奢りなく、無益のことに財を費さず、しかも吝嗇ならざるは、恭儉の一つにて、之を儉約ともいふ、富貴となりて



其本を忘れ奢侈に流れて己の職分をも誤まる如きは皆恭儉の道に違へり慎まざるべからず恭儉なる人はまた能く謙遜なるべし女の徳は殊に謙遜を尊ぶものなり人を先にし己を後にしわが身に善ありともことさらに之を顯はさず過ちあらば自ら之を辭せず如何なることにも自ら満つる心なき之を謙遜といふ古歌にもあすをまつ今日こころ花は盛りなれ

さきのこらずば散らずやはある  
といへり如何に時めき榮ゆとも決して自ら満つる心あるべからず

#### 第十四 徳川秀忠の乳母

徳川二代將軍秀忠の乳母にて世に大婆と稱するは生れつき才智ありて能く恭儉の道を守り而も客齋ならざる人なりこの大婆毎月一二回召使ひの婢女より興丁に至るまであまた呼び

つどへ手づから飯を  
盛りて饗するをこよ  
なき樂みとなしける  
が或る日つねの如く  
召使ひのものどもを  
饗する時本多正信入  
り來りこのさまを見  
て大に驚きいかなれ



ば斯る賤しきことをも自らしたまふぞあまた  
の侍女も侍ることなればそれ等にこそといふ  
に大婆は持ちたる飯匙を置きていひけるはそ  
こもとには昔の彌八郎といひし時を忘れたる  
かあらははもと參河に生れて鄙賤の家に人と  
なりしに圖らずも將軍の乳母に召し出されて  
幸に今日の榮華をうくれど昔を思へば僅かに  
五七人の客人を饗するすらまゝならざりしを

今は斯く大勢の人を集めて饗することを得れば、せめて其昔を忘れぬために、自ら數多の人の飯を盛りて、こよなき樂みとはなすなり、富貴にほこり驕奢をほゝいまゝにして、本を忘れんとする心こゝろうたてけれど答へゝかは正信いたく恥ぢ入り、いらへだにせで其座を起ちしとぞ

第十五 嫉妬を慎むべし 附 大和の貞女

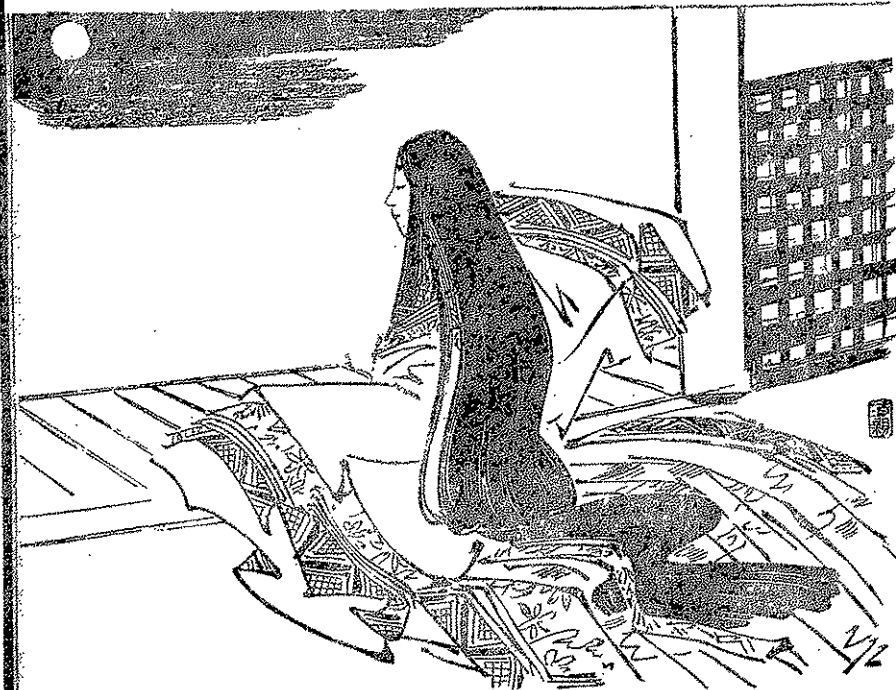
とかく女は嫉妬の心より、身を苦しめ、あゝき名を流し、人の笑種わらひぐさともなるものにて、恐るべきは此心なり、夫を思ふ心眞實なるときは、自ら嫉妬の心は出でざるものなり、古の賢女の

忘らるゝ身をば思はず誓ひてし、

人の命のをゝくもあるかな、

とよめる歌など思ひ出づべし、夫婦の和不和は、家の盛衰にもかゝはるものなれば、ゆめれろそかに思ふべからず、

むかし大和の國に女  
あり其夫身の行ひ修  
まらず外に出がちな  
りけれども嫉しと思  
ふけしきもあらで居  
たりけるが或る夜の  
ことに夫ひそかに立  
ちかへりて垣間見け



るに女はものれもはしげに空打ながめて

風ふけば沖津白波たつた山

夜半にや君がひとりこゆらん

と一首の歌を口ずさみけり夫聞きて限りなく  
憐れに思ひ其後はあだなる行ひも改まりたり  
となん女はゆらにやさしくして自然に男の心  
を感じるやうにするなんよき

第十六 堪忍 附張公藝



堪忍とは物に堪へこ  
らふる事なり物をこ  
らふる心なきより人  
と争ひ憤り思はぬ禍  
にもかゝるものなり  
よく人の仕向けあ  
くともよく忍びて我  
が誠を盡しなば結ば



れしものも遂には解けぬべし日影のどかに風  
うらゝかなれば軒のつらゝも池の氷もれのつ  
から解けざらめやは道なき人にわれ讐を報ゆ  
る心なくば其人或は愧ぢ或はめで慕ひて事平  
かになりぬべし長幼の序の調はざると上下の  
心の和らがざるも親類の中睦しからざるも皆  
堪忍の足らざる故なり昔唐土の張公藝は九世  
の親族極めて睦しかりしが時の天子其故を問

はせたまひゝに、公藝は筆を執りて、忍の字百あまり書きて奉りゝとか、學びがたき事ながら、常に心にいたゝめ思ふべし。

第十七 勤勉附つや女

家を治むるには、勤勉の二字を忘るべからず。勤勉ならずして、家富み身榮はんことを願ふは、居ながら遠きに行かんとするが如し。事終にかなふべからず。

つやは肥後國阿蘇郡の百姓七兵衛の家に育ちし下女なり。七兵衛家極めて貧しかりければ、つやがまだ十七歳の頃、錢十貫文の質にて、人に事へさせゝにつやは暇を窺ひ、夜ふくるまで獨り起き居て、芋をうみ綿をつむぎ、その勞を聊かの價にかへて之を貯へ置き、さまゝに心を碎きつゝ、十三年にして自ら身をつぐなひ歸りしに、七兵衛の家益々貧しくして、又つやを質にする

こと前の如くなくければつや愈々力を盡し此度は六年にして又償ひ歸りしが七兵衛の生計尙も乏しきを見てまた自ら人に仕へて一年の身の代を贈りけれどもその費えを補ふに足らざりしかばまたく身を質にして錢十貫文を得てこれを贈り四年にして自ら償ひ歸りしに七兵衛の家まだ立行くべくもあらざりしかば尙又重ねて身を質にすること前の如くせしが

此時七兵衛夫婦は既に老い衰へ農事もなうがたくて他にたよるべき人もなかりしかばつや深く之を悲みまたも幾倍の辛苦を重ね二年にして償ひ歸れりこれより家



に在りてぞ農事をつとめけるつや二十六年の  
 久しき五度その身を質にし得るところの錢四  
 十貫文膏血をそゝぎて七兵衛を助けゝり辛苦  
 の程たどふるに物なしかくて七兵衛の妻病に  
 かゝり八年の久しきにぬたりけるがつや病を  
 護りて一日も怠ることなかりしかば領主聞き  
 て深くその忠勤を賞し錢若干を賜ひけり後安  
 永九年に至り領主より重ねて褒美の沙汰あり

ける時つや病の床に臥していと危ふかりしか  
 ば郡代は錢を與へて藥用を助け村民は心を合  
 せて醫藥を贈り醫師は招かずして病を訪ひけ  
 り六十五歳にして亡せけるが村民共に謀りて  
 一の墓石を建て永く香華を絶たざりしとなん  
 つやは一貧民の子なれども勤勉かくの如くな  
 りしかば屢々主人の困厄を救ひ領主もこれを  
 賞し村民もこれを憐み名を末代に留めたり手



弱き女たりとて、孜々として精を出し業を勵みなば、などて家を興へ名を揚げざらんや、重んずべきは實に勤勉の二字になんありける。

第十八 正直 附 龜 婆

人は正直なるべし、正直を旨として、内外かはりなければ、名利私欲にひかるゝことなく、心に思ひ口に言ひ、身に動くこと、かれこれ相違はず物としてなびかざるなく、人として従はざるなけ

ん、古の人の言葉に人に與するに誠を以てすれば、疎しといへども必ず親し、人に與するに偽りを以てすれば、親しといへども必ず疎しといへり、考ふべきことなり、又正直なる人は心清らかにして、寸毫の私なく、義に背きたるものは一芥もこれを取らず、人に親まれ世に重んぜらる、龜女のごときは能く此行ひを守りたるものといふべし。

幕府治世の頃の事なりとか京都に龜婆といへる老婆ありけり或る日三條室の辻にて財布を拾ひけるが中をも見ずして傍の家に行きてもし尋ぬる人あらばこれを與へたまへとて財布を渡して出で行かんとくければ家の主は引き留めてこはいと煩はしく迷惑なり家業の暇もあらねば承け引き難くといふに龜婆は答へてあゝきなきことをいふ人かな落したる人の心

になりて見たまへいかばかりの心配ぞや是を預り置きてその人の來るを待たんにいかほどの勞やあるといひければ主もその辭に随ひくに日ならずして遺主たづね



來りゝかは直に之を出し與へけるに、遺主はい  
たく喜びて其内一兩を拾ひ得たるものに報い  
たくとて、これを頼みたり、家の主あづかりて、又  
の日龜婆の行き過ぐるを見て、呼留めてそのよ  
しを告げ、頼まれたる一兩を渡さんとせしに、龜  
婆はこばみて報いを得んと思はゞ、いかに先き  
の財布を人には頼むべき、遺主に渡されし上は、  
それにて事足りぬとて、

物持たぬたもとはすゞし、夕すゞみ  
と斯く口ずさみて、そのまゝ出で行きしとぞい  
とくゝ潔き心になん、

第十九 人の不幸を憫むべし

人は時の幸不幸によりて、榮ゆるもあり、衰ふる  
もあるものなれば、己榮にたりとて、人の衰へた  
るをさげすみ侮るべからず、

親類などれあふれて、其日の過ぎ難きあらば、意

を用ゐて救ふべし、概ね人は富み榮ゆる時は、他人までも親み、れちぶるれば親類だに疎くなるものなり、古歌に

れちぶれて袖に涙のかゝる時

人の心の奥ぞ知らるゝ

とあり、榮えたるよりも、れちめになれる時、殊更に頼もしく懇ろにすべし

第二十 人を使ふ心得 附 綾部道弘の妻

人を使ふには情ありて心をひろくゆるやかき持つべし、あづかのことに怒り罵る如きことあるべからず、とかく女は下婢などの思はぬ粗忽なども、口さがなく言ひこらすたぐひあれど、人品さがりて見苦しきものなれば、れほかたのことは力めてゆるやかにすべし、唐土の陶淵明といへる人は、我子の許へ下人をつかはせる時の文に、汝朝夕に苦勞を勉むることいと不便な

りと思ふ故に薪を探り水を汲むたすけに此下  
人を與ふるなりこれも亦人の子なり此者の親  
もわが汝を思ふやうにあるべければ情をかけ  
て使ふべしとあり常に此心を忘るべからず  
綾部道弘の妻ち子は豊後杵築の人小林政次  
の女なり夫に事へて貞順の聞えありけるが不  
幸にして夫にも死別れ災難のみ打續きて遂に  
長の病に臥しけり或る日婢を呼びて白湯を求

めしに如何しけん熱  
湯をすゝめしかばい  
たく指先きを爛かせ  
りたまゝむすめの  
髪ゆひさして傍にあ  
りけるが此さまを見  
てあはたゞしく母の  
もとに走り行きいた





く婢の粗忽をいましめしにしち子は婢を咎め  
んともせず又不興なる氣色もなくて唯笑ひて  
何事も言はでやみにしとぞ

第二十一 夫を選ぶ心得

夫を選ぶに其人の賢愚を問はずどからの考へ  
もなく唯容貌の秀でたるに心動きて嫁したら  
んには一生の身を誤ること多したとひ人にす  
ぐれし顔ばせ面ざしを具へたりとて心ばへの

愚ならんものは終身の幸福を全くすること難  
きぞかし又世には家の貧富によりて夫を定め  
其人の賢なると愚なるとを後にするものあり  
是等も思はざるの甚しきものなり夫賢なれば  
貧しといへども終には富むべく愚なれば富め  
りといへども終には貧しかるべし婦人一生の  
苦樂は貧富にあらずして夫の賢愚にありこれ  
をしも悟らずして唯貧富によりて夫を定むる

は之を人に嫁すといはんよりは、むしろ財産に嫁すといふべきのみ、思はざるべけんや。

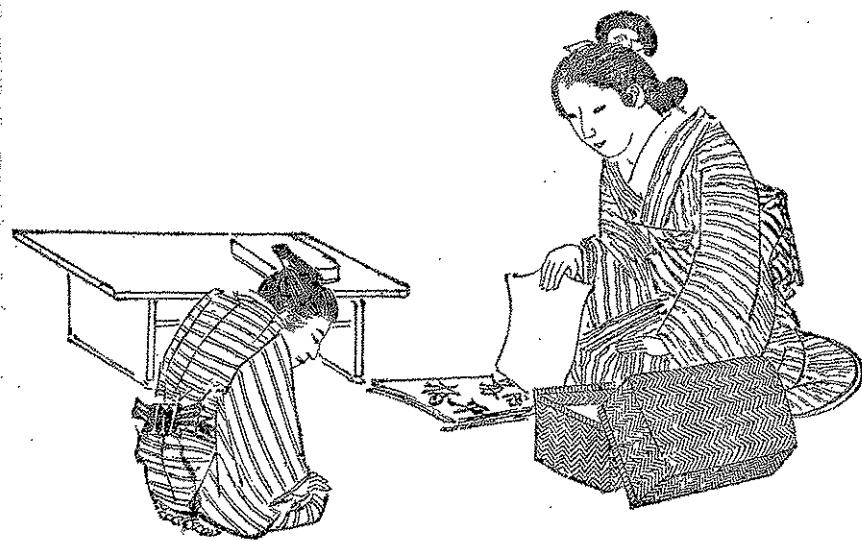
第二十二 教訓は嚴なるべし附 松山天姥の母

今日の幼年も、他日は自ら父となり、母となるべし、殊に母の教は幼き子供に取りて、最も大切なるものなれば、女子は常に能く此理を辨へ、他日自ら母となりたる時は、能く其子を教ふべし、教

へては能く嚴なるべし、慈愛に溺れて思ふがまゝに恣ならしむべからず、松山天姥の母の如きは、能く此理を辨へたる人といふべきなり。

松山天姥の母は賢女の聞えありし人なり、天姥安志侯に仕へけるが、侯儒雅を尙び、書法に秀でたりければ、其頃世に名高き書家、細井廣澤、關鳳岡などを友とせられけり、或る時、侯天姥の書才あるを見て、勤めて習ふべしとありければ、天姥

漸くに勵みけれども、  
猶怠り勝なりけり、母、  
傍よりこれを見て或  
る日、一つの古簾をさ  
げ來り中を傾くれば、  
反古うづたかきほど  
あり、皆天姥の幼き頃  
より書き習ひしもの



にて、其端には悉く年月をしるしたり、母は指を  
屈めて一々これを數へつゝ、汝何歳の時は斯の  
如く、何歳の時は斯の如し、故にあれ、汝の行末は、  
彼の先輩の諸先生にも劣るまゝと、常に喜び居  
たりしに、今其進みのいと遅きは、怠ることのあ  
るにやとて、涙をこぼしければ、天姥大に悔悟し、  
是より益々力を書法につくし、寢食を忘れて心  
目を古法帖にさらしけるに、遂に能書の名を

天下にとゞろかしける

第二十三 國法附春日局

何人も國法を守りて犯すことあるべからず人  
各々國法を守りてこそ國治まり家齊ひ民各々  
其堵に安ずるなれ

春日局は徳川三代將軍家光の乳母なり或る夜  
の歸り江戸城の平河門を入らんとせし時門番  
ども出で來りて夜中の通行は目付役の命なく

ては叶ひ難しとてこ  
ばみければ春日なり  
とて姓名を告げて請  
ひけれども應ずる氣  
色あらざれば局は已  
むことなく門外にた  
ゞずみけり時しも嚴  
冬のことなれば寒氣



はだへにせまりて堪へがたかり暫くして目付役の命下り扉を開きければ局入りて家光に見えけるに家光時刻おくれし故を問ひければつぶさに其故を述べけるに家光は打笑ひ居たり局は門番の法を守るの嚴なるに感ず夜明くるに及びて人を遣はしていたくこれに謝したりとぞ

第二十四 義氣と博愛 附 播州の老婆

女子とても義氣と博愛の心なかるべからず義氣とは事に臨みて進みはげむの氣象をいひ博愛とは物に觸れて施しめぐむことをいふ能く私を後にして公を先にし己を忘れて人を救ふべきなり

むかし羽柴秀吉の播州姫路の城を築かんとせしとき石材に乏しくして當惑の折柄ちかきあたりに住める一人の老婆ありておのが日頃用



めける茶臼を秀吉の  
陣所に持ち運びてい  
さゝかなるものなれ  
どもとて奉りしかば  
諸人もこれが爲めに  
はげまされぬさき  
にと石材を運び不足  
をれぎなひしかば城



は日ならずして成就してけり、秀吉は深く老婆  
が志に感ず、かの茶臼を人目に觸れ易き天主臺  
の石垣に加へ築きたれば、此石今尙人目にふれ、  
観る者をして其志に感ぜしむ。老婆が一旦の義  
氣よりして、かく諸人のはげみとなり、姫路の城  
の日ならずして成就せしこと、其功まことに大  
なりといふべし。凡そ國の爲め、君の爲めには、女  
子なりとも其力に従ひて公に奉ずるの心懸あ

るべきなり、外國にても國難の時、國中の婦人が、身の飾りなど賣代して、軍用を助けしため、など少からず、まして忠孝に富みたるわが國人の、この義氣なくしてよからんや、又日頃貧をあはれみ、窮をめぐむは更なり、天災地變などにて、食を絶ち家を失ひ、困難身につむものあるときは、無用の費はをばふき、慈善の財を施して、博愛を衆に及ぼすことを思ふべきなり、これ國民たる

もの、務めなり、忽せにすべからず、

第二十五 勇氣附 那須五郎の母

女の道は柔順をさきとすれど、さりとて又勇める心なくてはかなはず、世の中の女には、事に當りて驚き惑ひ、道に背き義を誤まること多し、これみな勇なき故なり、女とても君の爲め世の爲めには、女々しき心を退けて、愛を割き難を忍び、男子に劣らざる勇氣を勵むべし、勇の一つこそ、

人の心の寶なれとはこの御國の人の忘れまじきことなり。

那須五郎は世に聞はたる勇者なりしが文和の戦に京都にて兄弟三人一族郎黨三十六騎一足もひかず討死しけり初め五郎のこの戦に出陣するとき古郷の老母の許に人をやりていふやう今度の合戦にもし討死しなば親にさきだつ身となりて草の陰苔の下までも母の歎きたま

はんことを思へばい  
とかなしと暇乞を述  
べしに母は返詞して  
古より武門の家に生  
れしものは名を惜み  
て命を惜まず義を守  
りて忠を専らとすこ  
れ皆家の爲め世の嘲



りを耻づる故に、をしかるべき命をも塵芥の如くに棄つるなり、身體髮膚を父母に受けて、毀ひ傷らざりしは、その初め我につくすの孝なり、今また身を立て道を行ひ、名を後世にあぐることを、これ孝の終りなるべし、かまへて身命を惜み、祖先の名を汚すことなかれ、これなるは元暦のむかし、與一宗高が八島の戦に、扇の的を射て、名を擧げたる時、にかけたるほろなり、今之を汝に與

ふるぞ、ゆめく卑怯の振舞あることなかれといひて、薄紅のほろを錦の袋に入れておくり、與へぬ、五郎は老母にはげまされ、愈々義勇の氣を奮ひ、遂に潔く討死はせしなりとぞ。

## 第二十六 忠貞

古語に忠臣は二君に事へず、貞女は兩夫に見えずといへり、臣の君に事へ、婦の夫に事ふる、唯この語を守り、一筋に君夫を大切に思ひ、二心を懷

かずいかに艱難辛苦すとも其志を改むべからず、一たび利欲に迷ひ君にそむきて難をのがれ、夫をすて、人に従ふ如きことあらば、忽ち不忠の臣、不貞の女となり、たとひ百年の齡を保ち、身の榮華を極むるも、人の人たる道を失ひ、世に生けるかひなかるべし、よくく慎むべし。

第二十七 君恩

むかしは寒夜に御衣を脱ぎて、民の苦みを察し

たまひし天子あり、後鳥羽帝は

夜をさむみ、ねやのふすまのさゆるにも

あらの風を、たもひこそやれ

と詠じたまひ、後醍醐帝は

世をさまり、民やすかれといのるこそ

我身につきぬ、思ひなりけれ

と詠じたまひ、明治の御代となりては

冬深き闇のふすまを、重ねても

思ふは賤が夜さむなりけり

と御製遊ばされ皇后陛下にも

あやにしきとりかさねても思ふ哉

さむされほはん袖もなき身を

とものしたまひぬ國を思ひ民を愍みたまふの  
聖意いづれの御代かかゝらざらんされば我帝  
國の臣民たるものはたれか深く君徳の辱きを  
感戴しびたすら忠義の志をはげまし平生のこ

とにも男女各々其分に應じ納税は云ふもさら  
なりよろづ誠實に國民の義務を盡し以て天恩  
の萬分一も報い奉らざるべき



修身女訓卷之三

終

明治二十六年五月四日印刷 女生三  
明治二十六年五月七日出版  
明治二十六年九月一日訂正再版印刷  
明治二十六年九月四日發行

定價金拾錢

福岡縣

著作者

末松謙澄

東京市芝公園第五號地

發行所

八尾新助

東京市神田區錦町三丁目八番地

發賣所

八尾書店

東京市神田區表神保町一番地

